



みどりの子

令和7年7月号

所沢市立荒幡小学校
校長 小林 雅行

少年は手を離せ、目を離すな

毎日、蒸し暑い日が続いています。梅雨明けが待たれる今日この頃ですが、明けたら、明けたで、今年も猛暑の夏となりますでしょうか・・・子供たちへの熱中症対策は引き続き行っていますが、保護者、地域の皆様も十分にご注意ください。

さて、昨年のお子様の様子を思い浮かべ、今現在と比べてみてください。きっと驚くほどの成長を感じることができるのではないのでしょうか。

日々の子育てには「これでよいのか？」と自問自答が続きます。皆さんは、

- ・子は親を映す鏡、だからこそ、親としてしっかりと教育をしなければならない。
- ・子供が失敗しないように、親がフォローしなければならない。 など

このような思いに駆られることはありませんか？子育てに一生懸命であるほど・・・

決して間違いというわけではありませんが、子供のやること全てが親の責任ではなく、全ての失敗が子供をだめにするわけでもないと思うのです。

子育ての目標は「子の自立」です。私たち親は、子供を思うあまり「子供が自ら解決しなければならない問題」に、必要以上に手や口を出してしまうことがあります。それは、教師も同じです。私たちがいつまでも「子供にやってあげている親や教師」のまましていると、子供が自分自身で考え、課題解決しながら生き抜いていく力を身につけることができなくなってしまう。それは、私たちの望むところではないことは、言うまでもありません。

「子育て四訓」というアメリカの先住民の言い伝えをご存じでしょうか？

- ・乳児はしっかり肌を離すな
- ・幼児は肌を離せ、手を離すな
- ・少年は手を離せ、目を離すな
- ・青年は目を離せ、心を離すな

小中学生は二つ目から三つ目、高校生は四つ目でしょうか。小学校の3年生、4年生あたりからは、直接世話を焼くことを減らし、見守る姿勢が必要なようです。そうはいつでも、この「見守る」と言うことがなんとも難しいこと・・・「勉強しなさい」「早く起きなさい」などと、言わないと決心しても、子供は到底やるわけもなく、親ばかりがストレスフルに・・・こうなったら親と子の我慢くらべです。また、「自分が子供の頃に辛い経験をしてきたから、子供には絶対に苦労させたくない」という気持ちから、過保護になってしまうこともしばしば。

この「見守る」ということのヒントになればと思い、令和6年度の3月の学校便りで記載した一部を抜粋して載せてみます。きっと「見守る」ことは、「静観する」ということではないということが分かるのではないのでしょうか。

躰するにあたって、一昔前には「厳しく、怒鳴ってでも」とか「叩いてでも」とよく言ったものですが、最近は、我が子の性格や特性を十分に理解した上で、選択肢を与えたり、時には丁寧に諭したりと、考え・納得させた上で子供自身に選択をさせていく。

このような過程が重要視されるようになってきています。幼少期から納得に基づいた選択を繰り返させていくことで、受動的思考から能動的な思考へと変容し、自己判断力や自己解決力が確実に身につくようになるからです。しかし、保護者にとっては大きな試練です。選択肢を用意したつもりでも、思うような選択でないと、結果的に保護者が上から被せて誘導してしまったり、子供の判断を待てず、感情的になってしまったり・・・そうなると子供の自己肯定感はどん底です。

令和6年度の3月の学校だよりより抜粋

子育ては、自転車の乗り方を教えることに似ています。補助輪を外し、自転車の荷台からそっと手を離します。自分だけで走れたときの子供たちの表情を思い浮かべてみてください。あの表情が私たちの目指すべき「自立」した喜びを象徴していると思います。

子供たちが自分で考えて進む方向を決め、自分の力で進み、転んでもまた自分で起き上がって走り出せるように、私たち大人は寄り添い、そっと手を離して見守っていかうではありませんか。

子供たちの活動の様子をホームページ（R7今日の出来事）にアップしています。



所沢市立荒幡小学校 検索

二次元コード